『駆け抜けた８年間』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也

在宅診療を始めてちょうど8年になります。前の職場である洞爺温泉病院緩和ケア病棟で働いていた期間が8年間なので、ちょうど同じ年月になるのですが、体感としてはその半分にも満たない位の時間感覚です。

緩和ケア病棟で働いていた頃、この地域には在宅診療という選択肢が不足していることが折に触れて気になるようになりました。一般病棟に比べれば緩和ケア病棟は格段に居心地の良い場所であるとは思いますが、本音では家に帰りたいと思っている方は緩和ケア病棟にも少なからずおられました。いや、むしろ大半の患者さんは、可能であれば家で過ごしたいと思われていたのではないかと思います。しかしながら、患者さん本人が「家に帰りたい」と思い、家族も「家に帰らせてあげたい」と思っていても、家で診てくれる医師がいないと、家に帰ることは困難です。

自宅生活を実現する上でこの地域に足りないその最後のピースを埋めることができさえしたら、多くの患者さんが願っている自宅での生活を実現することができます。それこそ自分がやるべき仕事ではないか、という気持ちがだんだんと強くなっていきました。ただ、1人で24時間365日オンコールの生活を余儀なくされることへの不安もあり、踏み出せないでいました。

そんなことを考え始めていた矢先、横須賀医師会主催の医療講演会に講師として呼ばれる機会がありました。講師は僕の他にもう1人いて、それが秋山正子さんでした。秋山さんについては、NHKの『プロフェッショナル 仕事の流儀』等、マスコミでも取り上げられることの多い著名人なのでご存知の方もいらっしゃるでしょう。本邦における訪問看護の先駆者であり、「暮らしの保健室」や「マギーズセンター」の活動でも有名です。

講師控室で、秋山さんのこれまでの半生を、詳しく聴かせていただきました。火の玉のような情熱をもって開拓者としての道を恐れずに歩んで来られた秋山さんの話は、僕に大きなチャレンジを突き付けてくるものでした。そんなつもりで横須賀に行ったわけではなかったのですが、これが人生における出会いの妙というものなのでしょう。帰り道、僕の胸の中に去来していたのは、「義を見てせざるは勇無きなり」という言葉でした。今から9年前、2015年3月14日の出来事です。

次第に、やるとしたら今しかないと思うようになりました。知識・経験・体力のバランスがもっとも取れていて、医師として一番充実した仕事ができるであろう50代を在宅医療に捧げようと決心しました。そんな思いをもって、緩和ケア病棟で働いた8年間（その前の病院の緩和ケア病棟で働いていた期間を合わせると13年間）に終止符を打ち、2016年春、新たな職場で在宅診療をスタートしました。

当時、僕は49歳でしたが、奇しくも最初に看取った患者さんは、自分と同じ年齢の方で、数年間の闘病生活を経て刀折れ矢尽き果てた進行癌終末期の女性患者さんでした。まだ小学校に通っているお子様が2人いらっしゃいました。短い関わりでしたが、子供たちのためにもっと生きていたかったであろう患者さんのご遺体を前にして、今まだ生かされている僕自身の命を、新しく始めたこの働きのためにしっかり使うようにと、天からのメッセージをいただいているようにも感じていました。

あれから8年間、20代から100歳超に至る沢山の患者さんやご家族との出会いと別れがありました。最後まで独居で過ごされご自宅で看取らせていただいた方、大勢の家族に見守られて旅立たれた方、自宅での生活をやむなく断念し入院して最期を迎えられた方、退院して念願の自宅に帰り着いたその日に亡くなられた方、施設入居中に予測しない急変で亡くなられた方、癌の患者さん、神経難病の患者さん、脳血管障害後遺症で寝たきり全介助の患者さん、重度認知症の患者さん、精神疾患の患者さん、先天性疾患があり生まれてからずっと両親の愛情溢れる世話を受けてきた方、医師である僕ですら驚愕する奇跡の復活を遂げられた方…色んな方がいました。生身の人間である以上、僕自身が最悪の体調の時もありましたが、誰かに仕事を変わってもらうこともできないので、大袈裟ですが命懸けで数週間を乗り越えたこともありました。2年前からは、大久保潤一医師が手伝ってくれるようになり、週に1日オンコールも担ってくれています。

今や、僕もアラ還。上手く引き継いで行くことも考えて行かねばならないと思い始めています。